

待降節・アドベントⅢ礼拝

2022年12月11日（日）

題 「 イエス誕生の予告 」

テキスト：ルカによる福音書1章26～38節

皆さん、おはようございます。

今日の聖書の個所には、いよいよ主イエスの誕生予告の場面が記されています。時は今から約2000年前のことです。

◆イエスの誕生が予告される

26:六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。「6か月目に」とは、祭司ザカリアに天使ガブリエルが救い主イエスの到来を知らせ、その後ザカリアの妻エリザベトがヨハネを宿してから6か月目のことです。天使ガブリエルはガリラヤ地方のナザレに遣わされます。

ナザレは小さな町、村です。当時「ナザレから良いものは出てこない。」（ヨハネ1章46節）と思われ、当時の人々は見向きもしないようなさびれた町だったようです。しかし天地を創造された神は、このナザレの村に目をとめ、ご自身の計画を実行されたのです。人の見る目と神の見る目は異なっていると言われます。人の顧みない、光の当たらない場所を神さまは顧みられるのです。わたしたちも、そのことを忘れずに覚えておきたいと思わされます。

「27:ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。」とあります。神の目は心は、ナザレに住む、おとめマリアに向けられたのです。ここから世界を人類を動かすような大きな出来事が起こったのです。

マリアという名前は旧約聖書ではイスラエルの指導者モーセの姉で、ヘブライ語ではミリアムという名前で、そのギリシャ語がマリアです。旧約聖書はヘブライ語で書かれ、新約聖書はギリシア語で書かれています。マリアと言う名は当時良くあった名前だそうです。この時、マリアは今日で言えば15、6歳の年齢と言われます。

28:天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。

主があなたと共におられる。」

ここで大切なことは、天使ガブリエルがマリアの所に来たということ。

そして具体的に何も知らないマリアに神の言葉を伝えたことです。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」と。

後にこの場面は御子イエスの受胎告知として世界に広がって行きました。

世界中の画家たちが、歴史の中で自分たちの国の文化で生まれた絵画の方法で描いています。わたくしごとですが、14年前にこのナザレを訪問した機会があるのですが、受胎告知がなされたと言われていた場所に教会が建てられていました。最初の教会は4世紀に建てられたと言われます。受胎告知教会と言われます。ここの庭には、世界中の受胎告知の絵が展示されていました。日本画の受胎告知の絵もあったことをうれしく思いました。

ここで大切なことばは「神は共におられる。」というマリアへの天使の言葉です。短いことばですが、衝撃的なことばです。愛なる神さまは、おとめマリアと共におられるというのです。

しかし、この天使の告知のことばを聞いたマリアの反応が興味深いです。

29:マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。

マリアは天使のことばに戸惑ったのです。そして心は不安に包まれます。そして悩み考え込んでしまいます。これはある意味、当然のことだと思えます。今から起こる事への不安です。時代や状況は違っていても、わたしたちにも聞いたことばに不安を覚えることはあるのではないのでしょうか。

「一体、何が起こるのか、わたしは、また家族はどうなってしまっただろうか？」と不安になることもあります

そのようなマリアに対して、天使ガブリエルは、ことばをかみしめるように丁寧に語りかけて行きます。

「30:すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。

31:あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。

32:その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。

33:彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」と。

これは大変な内容のことばだと思えます。天使はそれをマリアに伝え、マリアはその言葉を聞きます。まず「マリア、恐れることはない。」という言葉が伝えられ、その後、「あなたは神から恵みをいただいた。」とあります。わたしたちも、後になって「そうだったのかな～」と思うような言葉との出会いはあるのではないのでしょうか。

天使がマリアにこれから起こることを伝えた内容です。

「31:あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」 マリアは自分が身ごもるという言葉聞いたのです。これはとても信じ

ることのできることはないでしょう。「そして、その子をイエスと名付けなさい。」と天使は告げます。「イエス」とは、旧約聖書では「ヨシュア」と言われ、当時男の子にはよくつけられていた名前です。その言葉の意味は「神は救い」です。

マリアが宿し、生まれる子の将来についても予告されています。

「32:その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。33:彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」と。生まれる子は、偉大な人になる。そして「いと高き方の子」と言われる。つまり「神の子」と言われる。また「神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。」つまりダビデが初代の王となったイスラエルの王となり、生まれる子は、「ヤコブの家」つまり神の民であるイスラエルを治め、その支配は終わることはない、と、伝えられたのです。

マリアは自分のこととして、天使に語っています。

34:マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」まだ結婚していないということです。ただ親が決めた婚約者ヨセフはいました。二人は後に結婚します。

天使の言葉は続きます。

35:天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。

「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む」マリアは守られていること。「生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」、その子の母となるために、選ばれ、神の救いの働きのために用いられることが伝えられます。

36:あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。これからマリアに起こることは、すべてが神の計画であるということです。それは救いの計画です。マリアは今後どのようなことがあっても神に守られているということです。

そして高齢で人間的にみれば不可能と思える中、ヨセフを身ごもったマリアの親戚であったエリザベトのことを出しています。

37:神にできないことは何一つない。」

「神にできないことはない。」とは神の力の完全さを意味することばのようですが、それは決して技術や機械的な完全さではないと思います。

神の子イエスの生涯をみれば、イエスは愛と苦難の人生を歩み、時の権力者に敵対視され、ついに逮捕され、共に生きた弟子たちにまで裏切られ、最後は十

十字架の死を受けたのです。神もまた独り子を十字架で失うという苦難を受けられたのです。父なる神と主イエスはつながっているのです。ですから「37:神にできないことは何一つない。」という言葉には、人間を救おうとする神さまの能力、力と共に、御子を失うという苦難も共にあるということ。その苦しみを神ご自身受けられたということだと理解します。つまり神さまの愛の力であり、エネルギーだと思ふのです。

神の子イエスの十字架の苦しみと死によって人間の救いは成ったのです。苦難と愛は異なってはいても、もはや分離できないのです。つながっているのです。イエスの十字架の死によって、愛は苦しみを自ら担おうとする力となり、苦しみは人と人とのつながりを生み出して行く愛の力を生み出すものとなったのです。それが主イエスの十字架と復活の出来事によって現れた神さまの愛の力なのです。「37:神にできないことは何一つない。」という力だと信じます。

「37:神にできないことは何一つない。」その言葉に対するおとめマリアの言葉、告白のことばです。

38:マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

マリアは、戸惑い、不安の中にありながらも、神の憐みの力で、神の力、聖霊に包まれ守られる中で、**これから起こる事すべてのことをマリア自身の信仰と自由な意思**で神に委ねたのです。ここから先、予想される苦難をも受け入れて行く、マリアの一途な神への信頼が救いの御子の誕生のために用いられたのだと思います。これはアドベントの奇跡だと思わされるのです。わたしたちはどうでしょうか？ 御子イエスの誕生、クリスマスを前にして、マリアの信仰に信仰に心留める日々を願います。

主の平安を祈ります。